「気候変動—多角的視点から」

W. J. バローズ 著，松野太郎 監訳，
大淵　済・谷本陽一・向川　均 訳
シュプリンガー・フェアラーク東京，
2003年12月，371頁，3,800円（本体価格）
ISBN4-431-71059-0

現在，地球温暖化の問題は世界政治の大きな問題として様々な議論が行われており，それに関連する一般向けの書物も多く出版されている．本書も，そのような，温暖化問題の解説書の一つと言えるが，本書は，類書には見られない特色を持っている．第一の特色は，副題にもあるように，非常に多角的視点から地球温暖化の問題を解説している点である．地球温暖化問題の解説書というより，むしろその背景にある気候変動についての教科書といっても良いくらいである．気候変動に興味を持ち，それについて本格的に勉強をしたい読者にとって良いガイドブックと言えるだろう．しかし，本書は気候変動の教科書として書かれたものではない．地球温暖化問題への理解を手助けすることを目的として書かれたものである．著者は，本書の「はじめに」の中で，「気候変動のすべての側面を見渡すことによって初めて，現在盛んに議論されている，環境，経済的あるいは社会的問題に気候変動がどれだけ関与しているのかということに対し，公平な判断を下すことができる．したがって，この本の目的は，読者がこの公平な判断を下せるように手助けすることにある．」と書いている．この「はじめに」の最後の文章からもわかるとおり，本書のもう一つの大きな特色は，地球温暖化の問題について，読者が自ら考え適切な判断を下すことを期待して，それに必要な素材を読者に提供し，著者の考え方や結論をあえて前面に出さない，というスタイルをとっていることであろう．

本書の構成は以下のようになっている．

第1章　序
第2章　放射と地球のエネルギーバランス
第3章　気候を構成する要素
第4章　気候変動の証拠
第5章　気候変動の結果
第6章　気候変動の測定
第7章　統計とその有意性，気候の周期性
第8章　気候変動の原因
第9章　気候のモデリング
第10章　気候変動の予測

第1～3章は，地球の気候システム，気候変動の基礎的解説で，いわば，ドラマの登場人物の紹介とも言える．続く第4～5章には，地球ができてから現在に至るまでの気候変動とその生物や人間社会への影響に関するドラマが描かれている．第6～7章では，前の2つの章で，あたかも見てきたかのように語られたドラマを記述するために用いられた測定データや統計手法に含まれる不確実性について，かなり詳しく述べている．これも，類書には見られない本書の特色の一つといっても良いと思われる．最後の第8～10章では，過去の気候変動のドラマの解釈，気候システムのモデルとそれを用いた気候変動の将来予測について記述されている．

地球温暖化の問題を扱った本としての本書の特色は，上述の通り，気候変動の全般について広範囲の問題を多角的な視点から解説していることであるが，この特色（長所）は，見方を変えると本書の短所とも言える．広範囲の問題を扱っているために，個々の興味ある問題についての記述について物足りないと感じる部分もある．また，著者の言うように「気候変動のすべての側面を見渡すことによって，公平な判断を下す」ことは，そう簡単ではない．本書を手がかりに，さらに勉強をする必要がある．そのために，各章の終わりに「さらに勉強するために」という参考書のリストがつけられている．リストの本は英語の本なのですぐに手に入らないという問題があるが，最近は関連する日本語の書物も多く出ているので，対応する日本語の参考書を探すのはそれほど困難ではないだろう．本書は，これから地球温暖化問題に関する議論について理解を深めるために勉強をしていこうと考えている人にとっては良いガイドブックと言えるだろう．特に，地球温暖化などの地球環境問題に関連する大学初年級の講義のテキストとして適切な1冊と言える．

（気象庁気候・海洋気象部気候情報課　杉　正人）

© 2004　日本気象学会